

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 13 NO. 1

(通巻48号)

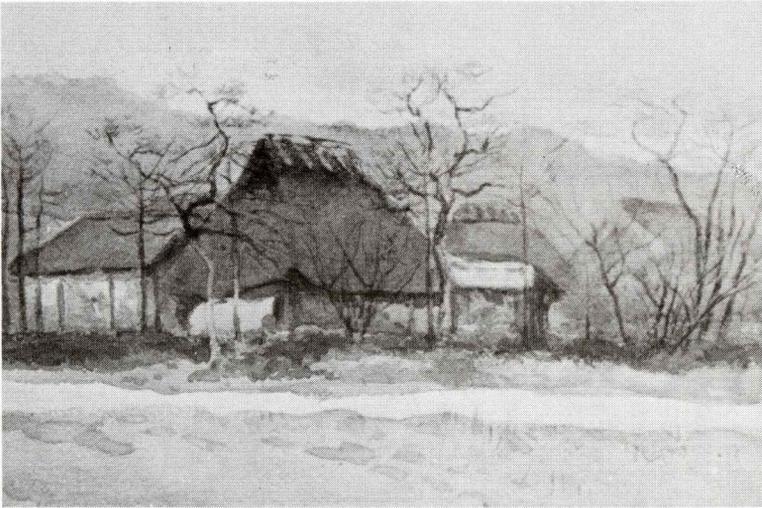
昭和61年5月15日発行

編集・発行人 平野 馨

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)



「農家」浅井 忠 1903(明治36年)

ずいそう

私の中の浅井忠

佐々木 真

ある診療所で医療器具の並んでいる壁に、大きな画用紙に描かれた和服姿の婦人のデッサンが掲げられていた。今の絵描きのものでないことは分ったが浅井忠と聞かされ、私は珍しいものに巡り合った思いだった。

おそらく、若い頃のものかもしれない、たどたどしさの残るけれども味の無い心安まるような習作であった。

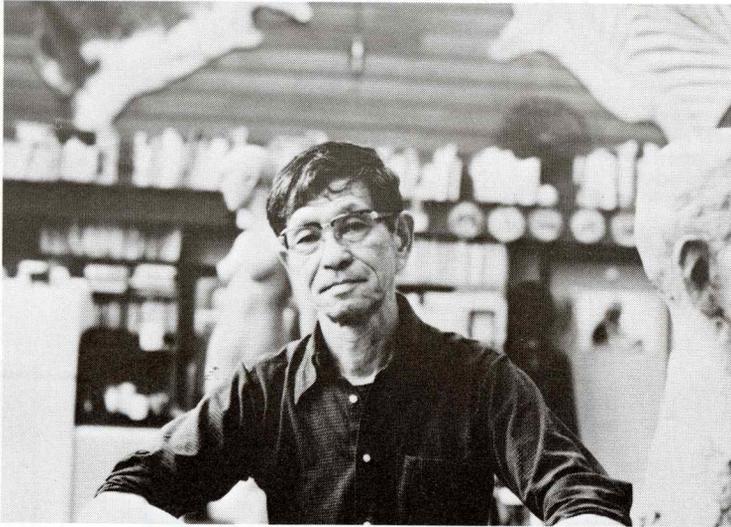
これまで私は何点もの浅井忠作品を見ていたのだが、黒田清輝やその後のやや近代化された明るい筆はこびの絵に興味をひかれていたので、素直な風景画家くらの印象で見ていたらしい。

ところがつい最近、纏まった大きな浅井忠展の会場に立つて、その画業の確かさと深さに今更の思いをさせられてしまったのである。美術に携わる者であれば、た

とえ一点の作品からでも作者の資質の琴線に触れて然るべき筈なのに、まことに私のお粗末であった。

安井曾太郎・梅原龍三郎など私たち世代の憧憬的な存在であった人々が、京都高等学校時代に、その初歩を浅井忠に教育されての出発であったことを思うと、後日あの個性豊かなそれぞれの道を選んだ根の底に、その薫陶の深さは否定できないものがあったのではなからうか。

今、日本の美術界が自分をも含めて、なにやら堪え性を失いながら、格好よく嘘の世界に足を踏み入れているのはなからうかという思いにかられているとき、この浅井忠の、あまりにも当り前に見える、この当り前さこそ、私たちが見失っていたものではなかつたのかと、静かな眼で語りかけられた思いである。



アトリエでの佐藤忠良氏

江戸の時代に生れた浅井は、六歳で絵筆をとったようで、当時の臨画や写生らしい絵をみても「槐庭」という号の書体をもみても、この年令の子供のものとは思えない技量と気迫を感じさせている。下手をすと価値観の多様化などという都合のいい言葉に甘えなくなりそうなのは、その当

時は無かっただろうし、厳しい教えに一生涯命になるより方法がなかったかもしれない。このことは浅井忠にとつての幸であつたにちがいない。いつか読んでロダンの語つた言葉を思い出す。習いごとは徒弟のやり方がいい、生徒はダメ・ダメ・といった意味のことであつたか、今妙に現実感

をもつて響いてくる。一昨年ロダン美術館を訪れたとき、ロダンの女性弟子クロードルの回顧展をやつていたが、私のような古臭い具象をやつてきた人間であるだけに驚きは一層だつたかもしれない。彼女の二十歳の大理石の男女の抱き合った作品の技術と芳しさに脱帽したが、当時なら特別騒ぎたてるほどのことでもなかつたのかもしれないが、若者がここまでやり抜いて見せることのできた徒弟的努力の結果だつたにちがいない。生徒はダメとロダンのいう意味を美術大学の学生に置きかえてみると、一年の半分の年間一日も休まずに通つても一年間分ということになる。そして13は休んでも規定時間数の問題にはならないとすれば、いかに職人を育てるのではないのだといえ、私は彫刻という触覚芸術の教育の基本的な要素から、だんだん遠のいて行く怖さを覚えざるを得ない。

十六歳で千葉の佐倉から東京へ移り住むようになった浅井忠の心には、新しい西欧への興奮が高まり、絵と英語の勉

強がはじまり、十九歳になつて本格的に油の絵筆を手にするようになったらしい。

二十歳になつたとき、丁度、工部美術学校にイタリヤからフォントナージが先生として招かれたのを機に、浅井は其処へ入学を許されての猛勉強が始まつた。僅か二年足らずのフォントナージの在住ではあつたが、この良き師との巡り合ひは、その後の浅井忠にとつて替え難い美の財産になつたことであつた。

四十三歳になつての洋行は、彼の素地と西欧への憧れとが一度に開花したかのように多くの佳作を残した。

それまでに従事しての絵以外は、主に農村やその辺にある極く普通の人々の生活の中に取材したものの多いのをみると、彼の心の中に潜む人間への深い心の寄せ方の現れとみていいのではなからうか。そのどの絵にも、ひけらかしを見せない浅井忠の自然で誠実な姿勢が流れている。

明治の中期に裸体画論争のあつたとき、彼は、裸体画に手をそめるのを三〇年待てと語つたという。当時の裸体画に對する人々の眼が偏見とある種の興味とをもつて迎えら

れるであろうことは容易に想像できることだが、浅井の保守的な心情というより、なぜ裸を描くのかという作者の態度とモデルをしつかりと観察できる条件の整わぬ眼と手で軽々に取り組まぬ方がいいという浅井らしい作画態度の言葉だつたのではなかつたかと思ふ。

私は、どちらかといえば、浅井忠の人物画よりも風景画が好きだ。それも水彩画が特に優れているように思う。

絵具を重ねることによつて効果をより強く可能になし得ることもできる油彩とは逆に、最初からある種の決定的な筆づかいをしなければならぬ水彩画は、下手をすると、単調で浅い絵になり易いことがある。その水彩が、浅井の手になると、まことに格調ある深い画面に出来上つてしまふ。彼の少年時代の日本画的教養が生き生きと甦っているかのようだ。

私が今更のよつに襟を正すことになつたのは、彼の自然の理法に謙虚な心配りと優しい詩情とが品格となつて、画背から静かに語りかける声だつたのだと思う。

昭和61年度 常設 収蔵作品展 I 期

4/15/8

61年度事業案内 ①

展覧会事業

特別展

「ヨーロッパ近代絵画の巨匠たち」展
会期 6月13日～7月18日
内容 別掲

第3部
北村西望、佐藤忠良、舟越保武、大國丈夫、堀川恭、山崎猛、原武典、久保田徹通、六崎敏光、島田勝吾、山本正道、梅原正夫、三木俊治、金田雄作、青木三四郎、酒井良、松本雄治、高田大

常設収蔵作品展
会期 I 4月1日～6月8日
II 7月25日～10月19日
III 12月5日～3月31日
内容 I 別掲 II・III 第2・3号

企画展
富取風堂展—房総の美術家シリーズ(16)
会期 9月13日～10月12日
内容 詳細第3号

第二回現代日本具象彫刻展
会期 1月31日～3月1日
内容 詳細第4号

第十回千葉県移動美術館
会期 ①丸山町中央公民館
9月26日～10月14日
②浦安市中央公民館
10月17日～10月30日

内容
本館収蔵作品の鑑賞の機会を広く県民に拡大し、地域文化の振興に寄与するため、県内2か所で行う。

次資料を寄贈いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。
北村西望氏より
北村西望作「二人の天女」(ブロンズ)
(前号追加分)

大郎、安井曾太郎、梅原龍三郎。

第3部

香取秀真、津田信夫、香取正彦、会田富康、信田洋、津田永寿、宮之原謙、山本正年、土肥満、藤田喬平。

第2部

浅井忠、フォンタネージ、松岡寿、都島英喜、石井柏亭、霜鳥之彦、間部時雄、黒田重

新収蔵作品を中心に本館蔵の彫刻作品を紹介します。

第1部

石井林響、古城江観、富取風堂、横尾芳月、東山魁夷、若

主要展示作家は次の通りです。

今年度収蔵作品展第1期は、3部に分けて構成しています。

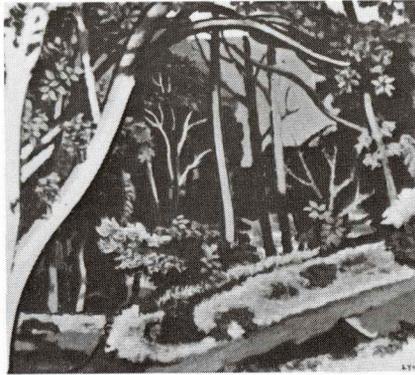
第1部では、収蔵作品の中から、日本画、工芸、書の分野を重点的に、明治から現在活躍する作家までを取り上げ御鑑賞いただきます。

第2部では、明治期の洋画界において大きな業績を残した佐倉藩出身の画家、浅井忠のコーナーを設けました。油

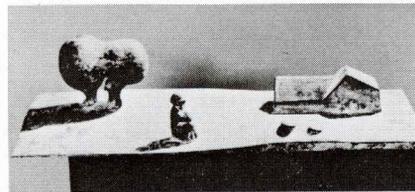
彫画、水彩画、素描画のほか、日本画、工芸等の分野の作品及びスケッチブック、図案画稿、教科書類等の資料類まで



小野具定「漁村」



安井曾太郎「熱海附近」



山本正道「ヴァージニア」

新収蔵作品紹介

購入

島田勝吾作「人間家族・妻の肖像」(ブロンズ)

寄贈

次資料を寄贈いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。
北村西望氏より
北村西望作「二人の天女」(ブロンズ)

特別展

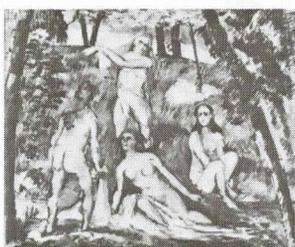
ヨーロッパ近代絵画の巨匠たち '86・6・13(金)〜7・18(金)

印象派からエコール・ド・パリまで
三十作家七十点の作品を展覧

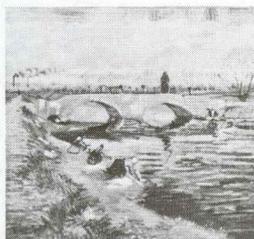
十九世紀から二十世紀前半にかけて、フランスを中心にヨーロッパの近代絵画は絢爛



ルノアール
「ばら色と青」



セザンヌ
「四人の浴女」



ゴッホ
「アルルのグレース橋」

として咲き誇りました。特に十九世紀後半に隆盛した印象派絵画以後、後期印象派、象徴派等、近代思考に富んだ絵画が次々と形成され、これらの潮流は、二十世紀に至り、フォーヴィスム、キュービスム、エコール・ド・パリ等へと連なり、今日の絵画に大きな影響を与えました。本展覧会では、印象派からエコール・ド・パリまでの主要な作家の作品に焦点を当て、各作家の特質及び近代絵画史上における功績について理解を深めるとともに、優れた美術作品を鑑賞する機会といたしました。なお、本展覧会は、「国際化」をメインテーマとして実施される昭和六十一年度、県民の日」行事の関連行事として開催するものです。

以下、出品作家の中から、各傾向の代表的な作家を数名取り上げ、その作風などを紹介しながら本展覧会のいざないといたします。

まず印象派の最も顕著な作

家としてモネ(一八四〇〜一九二九)が挙げられます。彼は自然の形態の表現よりも、それに變化を与える光と色の効果を描こうとしました。時間に応じて変化する光の表現に専念した彼は、同じ主題を違った時間には描きわけけるなどの試みを行って行きます。また色調分割の技法を適用して新鮮な色彩感を出す工夫をしています。シニャック(一八三三〜一九一五)は、スーラとともに印象派の色彩理論を更に科学的に追求し、その法則を技術的に取り入れ、点描法により、画面に一層の明るさと光輝性を与えようとしていました。新印象派と呼ばれる、印象派がおろそかにしたフォルムを再び絵画の中に構築しました。ドガ(一八三二〜一九一七)は、印象派展に参加しましたが、特に外光とか色調分割法に関心をもちませんでした。印象派の趣向と結びつくのは対象の瞬間の動勢を好んで表現した点です。パステ

ルの作品にも秀作が多くあります。晩年まで題材とした踊り子を扱ったものにもパステルが少なくなく、動的な一つの瞬間を鋭くとらえた表現に素描家としての卓越した才能を示しています。ルノアール(一八四一〜一九一七)は、はじめ印象派展に参加しますが次第に遠ざかりました。裸婦や花などを甘美な色彩をもって描き、豊潤さをたたえた生命感溢れる量感を創りあげました。セザンヌ(一八五九〜一九〇六)は、印象派の過度の分析、反射光の濫用と色の分解に反抗して画面を堅牢に構成しようとし、自然の対象を基本的な形体に集約して画面に新しく構築していく態度を進め、キュービスムを初めとする現代の諸流派に対して多大な影響を与えました。ゴーギャン(一八五八〜一九〇三)は、セザンヌ、ゴッホとともに、いわゆる後期印象派の三巨匠の一人に位置づけられています。印象派の手法に反対し、色そのものを色面として構成し、装飾的な効果が著しく、フォルムも単純化されています。線や色の

説明的な要素を省き、事物の本質を抽出しようとした。タヒチにおもむき、文明に犯されない逞しい無垢な原始のイヴたちを描いて独自の芸術の境地に到達しました。ゴッホ(一八五三〜一九〇六)は、オランダに生まれ、パリに出て、特に南フランスのアルルに移り、そこで真に独自の画風をうち立てました。その作品は、美しい筆触及び燃えるような色彩に満たされ、感情の表出がなされています。ルドン(一八四〇〜一九一六)は、象徴派の詩人たちと接触、ことにマラルメと親しく交わりました。豊麗な色彩を用いて、幻想的、神秘的な題材ないし花の絵の描写に独特の才能を示しました。彼のそれぞれの豊かな色彩の背後には、一貫して深い象徴が隠されており、のちのシュールレアリスムの道を準備しました。ボナール(一八六九〜一九四七)は、静物、風景、人物を配した室内を主に描きました。ゴーギャンのクロワジニスムと浮世絵版画の影響を受けたナビ派時代は、色彩の平面を組み合わせた画風を形成しました。中産階級の親しみ深い素朴な生活情景を扱った作品が多く、人物、風景、静物等



シャガール
「マーガレット
と恋人達」

のあらゆるジャンルを扱い、色彩の豊かな調和と生きる喜びを謳いました。マティス(二六九一―一九五三)は、ドラゴンやブランクと一諸にフォーヴィスムの運動に乗り出し、原色の大胆な並列を強調して激しい個性的な表現を企てました。原色を並べて補色関係によって互いの色度を強め、色質を純化する強烈な描法を試みています。印象派以来、フランスの作家たちに著しい影響を与えていた日本の浮世絵の平坦な表現と単純な色の関係が彼にも多くの影響を与えて平面的な表現に誘い、色種の単純化へと向かわせています。ルオー(一八七〇―一九五〇)は、必ずしも宗教に題材を求めるとは限りませんが、しかし、娼婦や道化師、人物を配した風景など、どの画面にも深い宗教感と高い厳肅な精神をにじませていきます。厚いマティエールと自由な逞しい描法のうちに独特な神秘的な芸術をうち立てました。二十世紀の代

表的な宗教画家と言われている。マルケ(一八五九―一九〇七)は、モローのアトリエでマティスやルオーと知り合い、フォーヴィスムの運動に参加しますが、他の作家の激越な調子と違い、常に均衡と調和の感覚を失わず、各地の河岸、海岸風景を落ち着いた色調で描き続けました。ブラマンク(一八六九―一九五〇)は、強烈な色彩配合と筆法によるフォーヴィスム特有の表現を行いました。一時期、キュービスム風の構成的な作風となりましたが、やがてスピード感のあるタッチでダイナミックな風景画を描き、独自の世界を築きました。デュフィ(一八七〇―一九五三)は、大きく色面の仕切りをつけ、その上を線描で軽妙に仕立ててゆく手法の独特な画面を形成し、彼の絵は子供のような無邪気さと大人の鋭い知性を持つていると言われます。後期の仕事は、ますます単純化を進め、軽妙の度を加えて、小気味よい画風をうち立てました。色彩、構成ともにマティスと同系統ですが、形態はマティスより一層単純化し、全体があっさりしていて装飾的です。ピカソ(一八八〇―一九七三)は、さまざまな傾向の、いず

れも注目すべき芸術を生み、造形的にも思想的にも最も多くの問題を提起し、深い影響力を持った作家です。貧しい人々を描いて特に青を主調色とした哀調ある「青の時代」、道化師や曲芸師の姿態を好んで描いた「ばら色の時代」などを経てブラックとともにキュービスムを創始。さらにシユールレアリスムに近づくなごさまざまな変貌を見せました。ユトリロ(一八六三―一九五〇)は画家のシユザンヌ・ウアラドンをもとしてパリのモンマルトルに生まれました。ほとんど独学で、画壇からも孤立し、哀愁に満ちたパリの街角など身辺の風景画を数多く描き、独自の画風を形成しました。特に一九〇九年から一九一二年頃の「白の時代」と言われる時期の作品は高い評価を受けています。ローランサン(一八六三―一九五〇)は、数少ない女流画家の代表的な存在です。女性らしい柔らかな淡い色調を特長とし、一抹の官能的なかおりをたたえた甘味な女性像を描きました。エコール・ド・パリを代表する一人です。シャガール(一八七五―一九五五)は、ロシア生まれで、パリに出てピカソと知り合い、キュービ

スムの感化を受けましたが、やがて幻想を主題とする画風を形成しました。特に故郷の風物が追憶のようによみがえり、また恋人たちが空を飛んでいるような作品が多く、彼の空想は自由自在にかけ巡り、詩味豊かな独自の画境を開きました。以上紹介しました作家以外にも、ピサロ、シスレー、ロートレック、ヴイヤール、ドラゴン、ドンゲン、レジエ、モディリアニ、スーチン、キスリング、パスキン、レオナルド・フジタなど、今回、いづれも個性豊かな三十作家七十点の油彩を中心とした作品が集められています。国内は勿論、外国の個人蔵をはじめ、サンパウロ美術館、エルミタージュ美術館、メトロポリタン美術館などからの出品も含まれています。ぜひ多くの方々にご覧いただくことを願っています。

ごあんない・団体展

- 鳳声会展
5月27日～6月1日
- 第6回匠の会展
5月27日～6月1日
- 千葉市アマチュア美術展
5月27日～6月1日
- 第11回関東全展
6月3日～6月8日
- 第13回千虹会日本画展
6月3日～6月8日
- 第9回千葉一陽展
6月10日～6月15日
- 第12回貌展
6月10日～6月15日
- 千葉県小中児童生徒書き方習字展
6月10日～6月15日
- 千葉県書道協会展
6月17日～6月22日
- 新槐樹社展
6月17日～6月22日
- 日本画四季展
6月17日～6月29日
- 第19回千葉県高等学校合同写真展
6月17日～6月29日
- 第11回葉美会展
6月24日～7月6日
- 第9回精鋭展
6月24日～7月6日

日本画入門講座

期日 5月13・14・15・16・21・22・23日(7日間)

講師 宮沢一雅氏

締切 4月30日

洋画研修講座(1)

期日 5月24・25・30・31日(4日間)

講師 羽生智樹氏

締切 5月10日

デッサン入門講座(1)

期日 5月27・28日(2日間)

講師 戸田健夫氏

締切 5月13日

彫塑入門講座

期日 5月29・30日・6月3・4・5日・10・11日(7日間)

講師 久保田徹通氏

締切 5月15日

書芸入門講座

期日 6月24日・7月1・2・8・

講師 宇津木雀声氏

締切 6月10日

陶芸入門講座

期日 6月24・25・26日・7月17・30日

講師 平野正房氏

締切 7月18日

市川富幾一氏

期日 6月10日

デッサン入門講座(2)

期日 6月25・26日(2日間)

講師 伊牟田經正氏

締切 6月11日

洋画研修講座(2)

期日 7月1・5・15・19日(4日間)

講師 太田洋三氏

締切 6月17日

書芸研修講座(1)

期日 7月19・20日

講師 種谷扇舟氏

締切 7月5日

てん刻入門講座

期日 7月23・24・25日(3日間)

講師 鈴木知秋氏

締切 7月9日

版画入門講座

期日 8月3・5・6・7・8・8・10日(7日間)

講師 平野正房氏

締切 7月18日

受講希望者は往復はがきに講座名、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、講座係まで。

ごあんない・実技講座

61年度事業案内 ②

普及事業

美術講演会

特別展に関連して、本年度2回実施する。

期日 (1) 6月29日(日) (2) 8月24日(日)

美術を語る会

特別展・企画展・団体展等と関連させながら美術に関する一層の理解と関心を深めるため定期的に実施する。

期日 (1) 7月13日(日) (2) 9月14日(日) (3) 10月5日(日) (4) 11月23日(日) (5) 2月8日(日)

美術館夏季大学

美術に親しみながら知識や理解を深め、その魅力に触れる。

実技講座

「みる・かたる・つくる」という本館の事業の一環として次の講座を実施する。

日本画・デッサン・版画・彫塑・七宝焼・陶芸・金工・

書芸・てん刻

(各2日・7日間)

研修講座

日本画・洋画・陶芸・書芸・てん刻(各3日・7日間)

美術館夏季大学

日 時 6月22日(日)及び9月7日(日) 午前9時30分～午後3時30分

場所 千葉県立美術館講堂
テーマ 「美術における東と西」

内容及び講師

6月22日

午前 細野正信氏「日本絵画における洋風の影響」

午後 村木 明氏「二十世紀のアメリカ絵画」

9月7日

午前 戸田禎佑氏「水墨画における中国と日本」

午後 本間正義氏「都市と彫刻」

受講料 無料

定員 二〇〇名

申込み 当日会場にて受付

特別展入場料の免除対象

六月十五日(千葉県民の日)の入館者及び六十五歳以上の

者、身体障害者(介護者を含む)又は精神薄弱者の方は入場料が免除されます。

日誌抄

- 12・13 展示室調整会議
- 1・17 友の会役員会
- 2・1 第二回研究会議
- 2・3 第五回美術を語る会
- 2・3 第三回美術館協議会
- 3・18 第四回美術館協議会
- 3・27 朝鮮社会科学代表团 来館
- 4・1 辞令交付
- 4・24 中国安徽教育学院周芑副教授来館

職員異動

昭和61年4月1日付けで、次の職員が異動しました。

◆転出者

菅井富美子(主任主事)文化課主任主事

武内喜美子(主事)中央図書館司書

◆転入者

飯村 洋子(中央図書館司書) ↓(副主査)

伊藤 和子(文化課主事) ↓(主事)